

人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点	学校全体として人権尊重の視点に立った学校づくりが組織的かつ効果的に進められている実践事例
-------	--

1. 基本情報

○都道府県名及び市町村名

石川県金沢市

○学校名

金沢市立安原小学校

○学校のURL

<http://cms.kanazawa-city.ed.jp/yasuhara-e/>

2. 学校紹介

○学級数

【通常の学級】 1～4年3学級 5、6年2学級 【特別支援学級】 2学級

【合計】 18学級

○児童生徒数

【全児童生徒数】 470人（平成27年10月1日現在）

（内訳：1年生81人、2年生74人、3年生74人、4年生80人、
5年生80人、6年生81人）

○人権教育開発推進事業、人権教育研究推進事業実績（実施年度及び事業の別）

平成26・27年度 人権教育研究推進事業 人権教育研究指定校

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校教育目標】 確かな学力と正しい行動を身に付け、心身の調和のとれた子どもの育成

【めざす児童の姿】 「自立 協働 貢献」

【人権教育に関する目標】

（基本目標） 「一人一人が大切にされ、ともに高め合える安原っ子の育成」

（重点目標） 「人権に配慮した授業づくり・仲間づくり・環境づくり」

○人権教育に係る取組一ロメモ

どの子も活躍し、どの子もわかる授業を目指した『全員参加の授業づくり』

○人権教育にかかる取組の全体概要

○ 人権が尊重される学習活動づくり

問題解決型の「安原授業モデル（つかむ・考える・学び合う・まとめる）」の各場面において、一人一人が学ぶ意欲を持つ「全員参加の授業づくり」と教科のねらいを達成する「共に高め合える授業」を目指し、具体的な手立てに取り組む。

○ 生徒指導部、特別活動部との連携

生徒指導部「思いやりリレー」 特別活動部「みんなでアクション」を合い言葉に人権が尊重される人間関係づくりを目指す。

○ 人権教育推進に関する点検・評価アンケート

5月と12月に児童人権アンケートを実施・結果分析し、取組の評価と課題発見の資料として活用する。また、毎月教師授業評価を学年で行い、教師の人権意識の向上を図る。

○ 家庭・地域との連携、校種間連携

道徳の授業参観を行い、保護者へのアンケートを通じて家庭でも授業の内容について話し合う機会を設ける。また、小中一貫の取組として、生徒指導の三機能を生かした授業づくりを意識することにより、授業の質と学習スキルの高まりを目指す。

3. 特色ある実践事例の内容

◆ 人権が尊重される学習活動づくりの取組

(取組のねらい、目的)

人権尊重の視点に立った学校・学級づくりを通し、児童の自己肯定感・自尊感情を高め、自己実現や学習意欲の向上を目指す。

(取組を始めたきっかけ)

本校の児童は落ち着いた学習ができているが、授業の中盤から学習内容が十分に理解できず学習意欲が低下してしまう児童がクラスに5、6人いるという現状があった。学校生活の大半をしめる授業中において、一人一人が活躍し、全ての児童が理解できることを目指し「全員参加の授業づくり」に取り組むことにした。

(取組の内容)

(1) 研究の推進

① 人権教育についての研修会

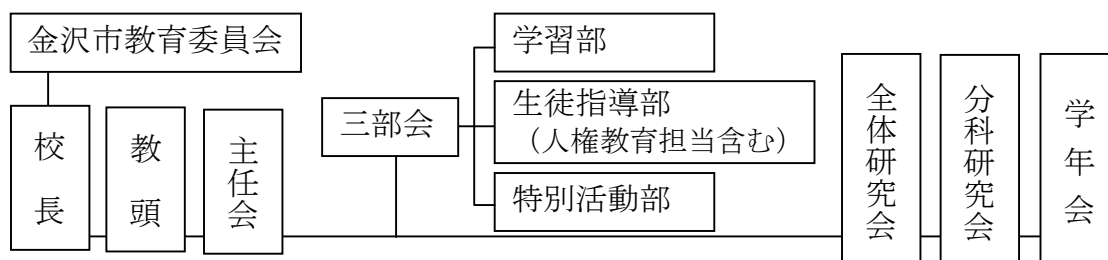
4月には、提案授業から研究をスタートし、指導主事を招いて研修会を全教職員で行った。

研修会では目指す人権教育の方向性について話し合われた。毎月一回のOJ (Learning Cafe) では、ベテラン教諭の授業をビデオで視聴し、全員参加の有効な手立てについて理解を深めた。

平成26年度の実践をもとに平成27年度は、1学期中に研究授業を終わらせ、8月の全体会ではこれまでの取組を土台に、「全員参加の授業づくり」へ向けた方向性や手立てについて更なる共通理解を図った。

また、「人権に配慮した教師の一日」について配慮事項を出し合い、行動の意識化を図った。

【研究推進体制】



② 人権が尊重される気持ちのよい環境づくり

気持ちのよい環境づくりが人権意識の醸成の原点だと考え、5S（整理・整頓・清潔・清掃・習慣化）運動を続けてきた。

環境に気を配ることは、「何となく心地よい」といった安心感だけでなく、危機管理の面からも安心・安全な環境とすることができる。まずは、教職員が人権教育の視点に立った環境美化の意識を高め、児童とともに気持ちのよい学校環境づくりを進めている。

③ 通信や校長だよりの発行による取組の共有化

人権教育を推進していく中で、共通理解したいことや、取り組んでいきたいことなどを研究通信で紹介してきた。また、研究授業後は、授業者が成果と課題を配付し、研究内容を共有化している。

校長だよりでは各学級の日々の取組や児童の姿を紹介しながら、教師の人権感覚の向上に努めてきた。



校長だよりの内容（教育実践研究家 菊池省三氏の書籍をもとに）

- 優れた授業者は、ほめ言葉をシャワーのようにかけている
「1にほめて、2にほめて、叱るのはピンポイントで またほめる
行為をほめる「ほめぐせ」をつけましょう」
- 叱るときの言葉と行為に気を付ける
言葉：「君が悪いのではない。君のその行為が悪いのです」
行為：その行為・言葉の周りへの影響を考えて叱ること 等

（2）安原授業モデルの各場面における「全員参加の授業の手立て」

児童が一人一人意欲的に活動できるように、安原授業モデルの4つの場面が児童の思考の流れに合わせてタイムリーに場面展開していくよう授業構成した。そして児童にも今取り組んでいることが、次の活動につながっているという必要感を持たせて進めることを大事にしてきた。同時に、児童の学習に向かう姿勢を絶えずほめ、価値付けながら授業を進めることを意識してきた。

つかむ

「つかむ」では、既習との違いから本時の課題をはっきりさせ、児童に「今日はこの課題を解決するぞ」という意欲を持たせることに重点を置いている。その際、課題を全員で確認することで、全ての児童が学習の土台に乗れるようにしている。



じぶんで

考える

1・2年は、

じぶんで

3年以上は

考える

課題に対する自分の考えを持つ場面では、全く考えが持てない児童がないように教師や考えを持てている児童がヒントを出したり、机間指導で個別支援をしたりしている。

みんなで

学び合う

1・2年は、**みんなで**
3年以上は **学び合う**

「学び合う」場面では、何人かの児童とだけで授業が進んでいかなないように、教師一人が全ての発言を受け止めるのではなく「Aの考え**について**、Bさんはどう思う？」と児童に返し広げていくように心がけている。

また、本時で学んだことを、自分の言葉でしっかりまとめられるように、教師は「キーワード」を板書に明記する。

まとめる

「まとめる」場面では、全ての児童が自分の力でまとめが書けるように、本時のキーワードを確認し、まとめが書けた児童から発言することで、どのように書けばよいのか分からない児童の参考となるようにしている。



さらに、「子供たち全員で学び合っていく」という意識を育てるために、

- ・ 話し手には、教室のはしにいる子まで届く声で話すこと
- ・ 聞き手には、友達の考えがしっかり伝わったかどうかを確認しながら授業を進めている。



上に示した掲示は、児童同士がよりよく伝え合うための話型である。単なる掲示にならないよう、機会をとらえて振り返り、学年で出来ているものと、これから使えるようになりたいものを意識させて取り組んでいる。

(3) 安原授業モデルの各場面における「共に高め合える授業の手立て」

つかむ

考える

「つかむ」場面では、児童が高め合う場となる「学び合う」場面でしっかり時間がとれるように、短時間での課題提示を目指している。

そして、「考える」場面では、教師は机間指導をしながら、児童の考えを認めると同時に「学び合う」場面で学習が深まるように、どの子の考えから提示していくのか授業を組み立てている。

学び合う

まとめる

「学び合う」場面では、児童の考えを教師が分かりやすく板書に分類・整理することで、今何について話しているのか理解できるようにしている。

その際、教師は、考えを深めるための発問を用意しておき、本時のねらいを一人一人にしっかりとつかませるようにしている。指導案上でも「二重カギ括弧」を使用して深めの発問を位置付けている。「まとめる」では、キーワードをもとに、自分の力で考えをまとめるようにしている。



(4) 生徒指導部・特別活動部との連携～人権が尊重される人間関係づくり～

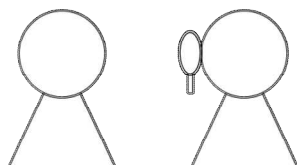
① 安原版ほめ言葉のシャワー

安原版ほめ言葉のシャワーの実践により、児童が自己存在感・自己有用感を互いに高め合うことで、他者を思いやる学級集団づくりに取り組んできた。

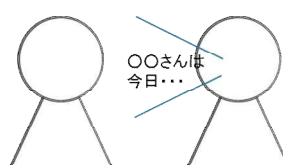
実践には、

- 朝の会にほめられる児童を決めてその子の行動を一日観察すること
- 帰りの会に児童が面と向かってほめる
- 何日間かけてクラス全員がほめられる機会を持つ

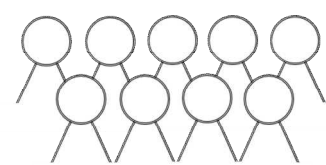
を共通要素として取り入れ、各学年でアレンジして取り組んでいる



1日観察



面と向かって



全員

② 価値の共有

価値の共有は、これも菊池先生のお話を聞いて考えたことである。学校における児童のよい姿を発見し、それを写真に収める。その写真を印刷して一言その写真に合わせた言葉を付けて掲示する。こうすることで、目指す姿について

学校全体で共有できると考えた。まだ取組が浅く、教師が撮った写真を6年生に示し、どの姿が価値ある姿なのかを問いかけ、児童が言葉を考えて掲示している段階である。今後は、6年生の児童が価値ある姿を写真に収め、言葉を添えて学校中に掲示していくことを考えている。

その価値ある姿が、安原小学校の伝統となり、思いがつながっていけばと思っている。



③ ねらいの明確化

特別活動部では、「みんなでアクション」をキーワードに、行事の計画段階からめざす児童の姿「自立」「協働」「貢献」に正対した具体的な姿としての評価基準を設け、取り組んできた。

「運動会」や「たてわり遠足」などでは、目指す姿をもとに児童が話し合い、決めた目当てを一人一人が意識して活動することで、共に達成感を得ることができた。学校行事の中でも、授業と同じように自分たちのゴールが明確であることが、児童一人一人が安心して主体的に取り組める要因となった。



運動会



たてわり遠足（清掃活動）

（５）家庭・地域との連携、校種間連携

① 全校一斉道徳授業参観実施

6月授業参観では、全校一斉に道徳の授業を行った。学年で教材研究した同一教材による授業を公開し、授業参観後は、保護者から授業についてのアンケートを実施した。アンケートには、家に帰ってから児童と授業について話し合ったこと等が記されており、学校での取組をダイレクトに保護者に伝えることが、家庭における人権教育を啓発する上で大切であることを再認識することができた。

〈保護者アンケートより〉

物を大切に使う…の「大切に使う」とはどんなことか、子どもと話しました。子どもは、「大切にとは、ながく使うこと」と話してくれました。子どもだけでなく、親も一緒に「物を大切に使う」ことを約束しました。

（1年保護者）

② 小中連携道徳研究授業交流会

11月に小中連携教育推進事業の一環として、道徳の公開授業を行う。道徳を中心として小中でつながりを持ち、生徒指導の三機能を生かした授業づくりを意識しながら、互いの授業の質と学習スキルの指導力向上を企図している。

4. 実施する際に生じた課題及びその解決策

【課題】「全員参加の授業」に対する教職員の共通理解を図る

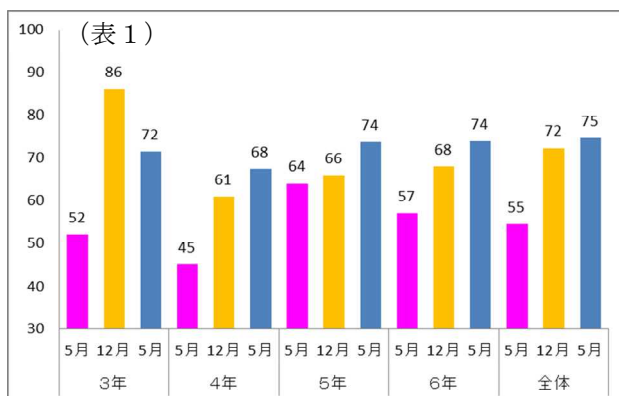
全員発表したり、ペア学習やグループ学習をしたりするのが全員参加の授業づくりではなく、児童一人一人が学習意欲を低下させることなく、それぞれの学習場面において全員が活躍し、全員が学習内容を理解できる手立てを教師が考えて取り組んでいくことこそが、私たちの目指す「全員参加の授業」である。しかし実践を重ねていくうちに、教師間の認識にずれが生じてきた。

【解決策】「全員参加の授業」の捉え方を共通理解し、共通実践する

研究授業後の考察から、有効であった手立てを洗い出したり、全体会を通じてそれぞれが思っていることを話し合ったりして具体的な姿で共通理解を図る。

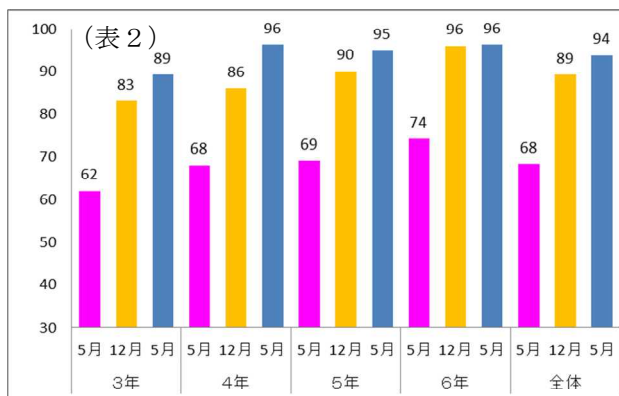
5. 実践事例の実績、実施による効果

平成26年度より行っている児童人権アンケートの結果である。



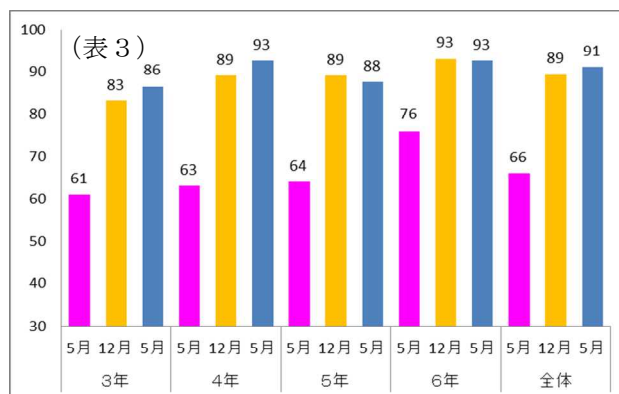
自分にはよいところがある

「自分にはよいところがある」と答えた児童の割合は、昨年5月（前学年5月時点のアンケート）と比較して、今年5月では全体で20%の上昇があり、児童の自己肯定感が高まっていることが示された。（表1）



先生や友達の話最後まで聞こうとしている

「先生や友だちの話最後まで聞こうとしている」と答えた児童の割合についても26%も上昇している。人権教育の目標である「自分の大切さとともに他の人の大切さを認める」という意識の向上が見られる。（表2）



授業はよくわかる

「授業はよくわかる」と答えた児童の割合についても25%も上昇している。全ての児童が理解できる授業を目指して行ってきた取組が成果につながった。（表3）

どの項目も、昨年5月から12月までの取組で数値が上昇し、今年度においても数値を保ち続けていることは、本校における取組が児童の人権意識の向上につながったものと考えられる。

6. 実践事例についての評価

(取組についての評価、及びそう評価する理由)

授業実践の考察や人権アンケートの結果から下記の成果と課題が見いだせた。

【成果】

- ・ 安原版ほめ言葉のシャワー等で一人一人を大切にきた場を設定してきたことで、様々な観点で友達の良いところを見つけようとする姿が見られ、それを学級の児童と共感し合うことで児童の自己肯定感の向上が見られた。ほめられた子はもちろん嬉しそうであったが、ほめた子も「みんなが気づかなかったところを上手に見つけたね」と認められることで双方の自己肯定感の高まりが見られた。
- ・ 教師が人権教育の視点に立った環境づくりや人間関係づくりについて、研修や校長だより等で共通理解し、共通実践してきた結果、教職員の児童一人一人を大切にする意識が向上した。また、授業中に教師のほめ言葉が増えることで、児童の学習意欲の高まりが見られた。児童は、美しく整頓された教室や温かい言葉の心地よさを知るとともに、価値ある行動が何かを理解することで、いろいろな活動に主体的に取り組む姿が見られた。
- ・ 授業においては、「〇〇さん、まだ話してないよ。〇〇さんが話したら全員になるよ。がんばれ」という声かけが見られたり、答えにつまずいた児童に対して、「〇〇さんの言いたいことわかります」と代わりに発言する姿が見られたりと、友達の話を聞き、児童が共に学び合おうとする意欲の高まりを感じた。一人一人を大切にきた人間関係づくりに取り組んできたことで、授業の場面においても、友達を大切にする姿が見られるようになった。
- ・ 教師・児童ともに安原授業モデルにおけるそれぞれの場面で、目的意識を持って取り組むことができるようになった。「学び合う」の場面では、「考えに自信がない子も分かるように、みんなで学び合っていこうね」と教師が子供たちに確認することで、考えを持てている子が分かりやすく話そうとする姿が見られた。

【課題】

- ・ 安原型ほめ言葉のシャワーについて、全教職員で共通理解を深め、組織的・継続的に取り組んでいく。
- ・ 安原授業モデルにおいて、「学び合う」の場面の時間を保障し、一人一人の言語活動を充実させ、自己存在感を高めるとともに、全員参加の授業づくりに取り組む。
- ・ 児童の考えを共感的に受け止めたり、板書に児童の考えを明記したりすることにより、自己存在感や自己有用感を高めるような教師のかかわりを行っていく。

【人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント】

金沢市立安原小学校

人権教育の基礎とされる自尊感情・自己肯定感を育みつつ、「安原授業モデル」というシンプルな枠組みを打ち出して授業を展開することにより、児童の自己肯定感・自尊感情を培うことに成功し、併せて充実した授業を形あるものに行っている。「つかむ・考える・学び合う・まとめる」という「安原授業モデル」では、児童の学習意欲を引き出し、全員発言などを実現している。2008年と2012年の二回にわたって行われた全国の人権教育取組状況調査によっても、このような取組が人権意識の土台を作ることが理解できる。同時に同調査は、人権にかなう実践力を培うには、このような取組の土台の上に人権課題や人権条約など社会の現実を批判的にとらえる観点や、自分たちの間に発生する問題や対立を自ら解決する経験が重要な意味を持っていることも示している。「全員参加の授業づくり」「ほめ言葉のシャワー」「安原授業モデル」等の取組をもとにした、人権教育の進展が期待される。